

空飛ぶクルマ

2022.2.9

「空飛ぶクルマ」と言われても、もはや昔のSFの世界とは思わなくなっているのではないか。空想上のことではなく、現実のものと認識されるようになってきている。

自分が子どもの頃に、携帯電話など想像もできなかった。それが今では当たり前のように使っている。空飛ぶクルマもそうである。ついこの前までは、漫画や映画の世界のことだった。車に乗って空を飛んでいたのは、007のジェームズ・ボンドくらいである。

それが、私が生きている間に、車が空を飛びそうなのである。2020年に、日本で初めて有人の公開飛行に成功している。既に法定速度や飛行高度、離着陸できる場所の条件なども国などに提案済みなのだという。2025年の大阪・関西万博では、お客さんを会場まで乗せるエアタクシー事業を立ち上げる準備が進められている。

特徴はというと、電動、自動運転、垂直離着陸である。騒音も少なく、環境に優しい乗り物である。滑走路は必要なく、乗用車2台分くらいのスペースがあれば止められる。障害物のない空を時速100キロで飛ぶため、東京ー横浜間ならば約10分で移動できる。

通勤に1、2時間かかっている人は、移動時間を大幅に短縮できる。しかも、機内（車内）はパーソナルな空間のため、移動中に周囲に気を使うことなく映画などを楽しむこともできる。ドライブに利用すれば、渋滞に巻き込まれることなく目的地に行ける。交通の便の悪い地方や、離島、山間部の新しい移動手段になる。災害時の緊急搬送など医療分野での活用も期待できる。

世界中で空飛ぶクルマの開発競争が起こっている。開発に取り組んでいるプロジェクトが約400ある中で、有人飛行に成功した会社は、いまのところ僅か10社くらいしかない。そこには、日本の会社も含まれている。

とはいっても、空を飛んで移動するのは怖い気がする。事故の起きる頻度でいうと、航空機の方が自動車よりも安全である。航空機の事故率は、自動車の約1000分の1である。空飛ぶクルマも航空機と同じレベルの安全性が求められる。

有人飛行に成功した日本の会社の代表取締役CEOは、会社の指針として、自身がトヨタ自動車ですんだことを土台にしている。その底流には、誠実に仕事と向き合うことの大切さがある。一流の方ほど誠実さが段違いの印象があると、そのCEOはいう。

誠実なものづくりということだろうか。空飛ぶクルマは、人様の命を乗せて運ぶ乗り物であるから、我々の誠実さの度合いに会社の将来も大きく左右されると前述のCEOはいう。誠実さを乗せた空飛ぶクルマが空を行き交う世の中も、そう遠くはないようである。楽しみのような、やっぱり怖いような、それでいてワクワク感があるのも事実である。